「人間も動物なんだね」

漢字教育をしている幼稚園のことです。

節分の日に、黒板に“節分”という字を書いて、先生が話しました。「節分とは、季節の分かれめという意味の言葉です。冬の季節が今日で終わります。寒い風の吹く、いやな冬、行ってしまえ、という気持で、“鬼は外”と言って豆をまくのです」とすると、園児の一人が「じゃあ、“福は内”って言うのは“春よ来い”ってことだね」と言ったのです。

その次の日は、“立春”という字を書いて「きょうは“立春”の日です」と言って、その話をしたところ、こんどはまた別の園児が「こよみの上では春だけれど、また寒いね」と言って、先生を驚かしたのです。

言葉は、言葉として説明されただけでは理解しにくく、記憶にもとどまりにくいものです。ところが、文字と共に説明されると、理解しやすく、また、記憶にもとどまりやすくなります。

“節分”が“季節の分かれめ”であり、“立春”“春の立つ日”であることは、言葉だけの説明では決して理解され記憶されるものではありません。

ところが、漢字と共に説明されますと、幼児でもちゃんと理解し、言葉を漢字と共に記憶し、それを正しく生活の上に使えるようにまでなるのです。

わたしが、一年生に、初めて漢字教育を実験した時のことです。教科書に“どうぶつえん”という言葉が出てきたので、これを“動物園”という漢字に直して教えました。

すると、子どもたちが「先生“動物”って、“動く物”って読めるね」と言うのです。わたしは、「ああ、よく気がついたね。君たち、チューリップやたんぽぽや桜の花が生き物だってこと、知っているだろう。でも、お花は動けないね。生き物には、だから、動ける物と動けない物といるわけだ。それで、動ける物は“動く物”と書いて“動物”ということにしたんだよ」と言いました。

すると、子どもたちは、初めて聞くという顔をして目を輝かして聞いていましたが、「先生、じゃあ、とんぼもちょうちょも動物なの」と、驚いたように尋ねました。

「ああ、そうだよ」と答えると、他の子が「じゃあ、金魚もだね」と言います。子どもたちは、とんぼやちょうは虫であって動物ではない。水の中に住むものは魚であって動物ではない、と思っていたのです。

これは、子どもに限りません。おとなで，も、“動物”を“哺乳動物”に限って使う傾向があります。ところが、最初から漢字で学習すれば、一年生でも正しく理解するのです。

最後にある子どもが言いました。「先生、人間もやっぱり動物じゃあないの」